# 自然主義とナショナリズム
# (Naturalism and Nationalism)

鈴木敦巳・日夏　隆

## 「日清・日露戦争—文学とナショナリズム」

### [I]

日本のナショナリズムと文学の関係は，とりわけ，文学面で注意しなければならないのは，日清戦争と，日露戦争については，そのナショナリズムが，ちがった形をとってあらわれたことに注意しなければならないであろう。

高等学校の副読本などには，よく，日清戦争と日露戦争が，近代日本としての「一連の」画期をなすとする連続面のみが強調され，二つの戦争にたいする日本人の精神的態度の差は，ほとんど着目されていないか，さもなくば，その「差」について論及することがあまり少ないと言わねばならない。

すなわち，ほとんどすべて，例外なく戦争に賛成したのであった。近代国家として未成熟な，曖昧な，かつ無責任な形をとってではあるが一応議会も開設され，民主・史党の対立は激しかった時期を経て，民党＝野党＝民権派残党の側から主戦論がうまれ，日本と清国の衝突の際には，むしろ，政府よりも，野党の側が強硬論をとっていたのが事実なのである。

キリスト教徒の側でも，非戦の思想などは，ほとんどなかった。たとえば内村鑑三は，断固として戦争を支持したし，一方，民権派残党たる壮士上がりの一人，幸徳伝次郎は，この当時，野心あふれる新聞記者候補であって，戦争の最中，大本営が広島に移されるやいなや，さっそく広島に馳せ参じ，なんとか特ダネをとろうとしていたほどだったのである。精神的風土は，日清戦争の戦中には，排外主義が，ほとんど無批判に支配していたのだった。

日清戦争が近代日本の最初の近代的対外戦争だったことは言うまでもなかろう。

だが，この時，近代戦とはいうものの，戦死，戦傷の数および物的損害は，その18年前の西南戦争よりもはるかに少なかったのも，また事実なのである。つまり，内乱よりも，損害が少ないということ。かつ，日清戦争当時の，海軍の主力艦は，ほぼ幕末，維新期に装備された海軍力によってまかなわれ，それが清国にたいしては，よりすぐれた能力をもったことも，また事実なのだった。

問題は，戦後にあった，

戦争に賛成した作家・インテリゲンチャの中から，初めて公然と戦争にたいする批判が出現し

たのである。インテリゲンチャ・作家たちは，はじめ戦争に賛成したのだったが，戦争がおわって，はじめて，「対外戦争」の悲惨に気づいたのだった。戦争そのものよりも，異常な物価の上昇，市民生活の圧迫，戦争景気に気ずいておこった不景気のすさまじさ，廃疾・不具などの社会問題——これらは，これまで，単純に，近代国家としての対外戦争の最初として，漠然たるナショナリズムに，深い疑問と責任をなげかけたのであった。

わたしは，日清戦争当時のナショナリズムと言われるものを，民権左派以来の玄洋社的大井憲太郎的，アジア主義では，とらえきれないと考える。

もし，この，いわゆるナショナリズムが，真の，というのも奇妙だが，ブルジョア国家としての内実に裏打ちされていたならば，戦争の文学に，これほど深刻な影響を与えはしなかっただろう。

「深刻小説」「悲惨小説」ひいては「社会小説」への動きは，みな，日清戦争をおそらくは，無意識に通過してしまった反動として戦後になって，はじめて，厭戦・非戦気分の強まりがおこったことに根ざしているのである。

硯友社の解体過程は，最も重要な基盤として，この日清戦争後の社会不安に，どう対応するのかにあったのである。

［Ⅱ］

いわゆるナショナリズムは，日清戦争後を，どうのりきっていくかについての各層の分解に対応しておこってきたのである。

日清戦争は，文学的には，「悲惨小説」の名でいみじくも象徴されるように，むしろ，非戦･厭戦ムードを拡大した。ナショナリズムに限って言えば，戦争に大々的に協力したかっての民友社主流は，「国民之友」の発行部数の減少に驚かざるを得なかったのだった。

「国民之友」はやがて廃刊においこまれるし，むしろ，厭戦ムードが戦後に主流になったことだけは確認しておきたい。くりかえすが，日清・日露にははっきりした違いがあった。

通史でよく書かれる「臥薪嘗胆」のスローガンは，表面だけを見れば，広くナショナリズムをつくりだしていったとされるのは，フィクションであり，あくまで，この時期では支配者の願望でしかなかったのである。このスローガンをかかげた新聞は，まず「日本」や「読売新聞」だが，これらの新聞は，ずっと大衆基盤をうることに苦しみ，不振を続けていたのである。日清戦後は，普通，新聞の発展期とされ「万朝報」「二六新報」などの反政府的新聞は毎年，一万以上の増加を確実なものにしていたが，一方の「読売新聞」は，戦後わずかに，一万八千部から一万九千部にといったぐあいに，不振をかこたざるを得なかった。(「読売新聞八十年史」，および上司小剣「Y新聞年代記」)

広津柳浪が，あらたに発刊された後藤宙外の「新著月刊」に，次々に小説・談話を発表し，日清戦前と戦後のあざやかな違いを示しているのである。

柳浪は，後藤宙外の質問に答えて言った。労働者なら労働者を写すとともに，当時の時勢を見えるように書かなくてはなるまいとおもふ。例へば人力晩はあわれな境遇だとか，また時には幸運な地位に立つこともあるが，さうなるのには色々周囲の事情あってなるのだから，勿論その因縁を議論するやうに書けと云ふのではないが，自然にその陰が見えるやうに描きたいものです。約めて云へば，一個人を中心として労働社会の大勢を窺うるやふに書かなくては…（「新著月刊」）

ここまでの雰囲気は，ナショナリズムとは，ほぼ，まったく正反対のものであった。
だめおしに一つだけ例をあげておこう。

教育勅語改定問題である。

帝国議会の成立と重ね合わされた形で発布された教育勅語は，「君二忠二夫婦相和し…」と続くものであることは周知の事実であろう。股，この勅語が，儒学的忠考思考と近代的親子関係を折衷したものであることも，源了円氏らの研究によってすでにあきらかにされている。日清戦争直前，直後まで，この折衷は現実的に機能していたと言えよう。しかし，日清戦争の社会不安の中では，この教育勅語的論理は，一時期，深刻な動揺を免れざるを得なかった。

西園寺公望が文部大臣になった日清戦争直後，彼はもはや教育勅語によって，国民を律することは不可能ではないかと考えたのである。西園寺は，明治天皇に直接，勅語の変更を上申したし，天皇は，承知したのだった。教育勅語は＜現実には＞されなかったが，これは，内閣が倒れ，西園寺公望が文部大臣の職から去ったことによる偶然であった。

この政治史のひそかな動揺は，日清戦争後，ナショナリズムに反するムードがむしろ支配的だったことを示している。「万朝報」「二六新報」等には，反ナショナリズムの論説や記事を連載することによって発行部数をのばしたのであったから。

［Ⅲ］

すなわち，日清戦争後には，アンチ・ナショナリズムが広がりつつさえしたのである。この時期を通じての文学の特徴は，「深刻小説」といい，「社会小説」といい，ひいては，ゾライズムの先駆とされている永井荷風の初期作品をも含めて，深い動揺が，文壇をおおっていた。

森鴎外が，当時の文学の状態を「末流文壇」と規定して絶望の叫びをあげたのは，明治三十三年のことだった。鴎外流のクラシシズムは，そのころ「古いもの」として文壇では，葬られかけていたのだった。

しかし，ナショナリズムは，対ロシア戦争をむかえるころになると，再び，文壇を襲ってきた。日清戦争の直接の被害が西南戦争の内乱より少なかったことを述べた。そのことは，戦争，ひいては近代的国家間戦闘につきもののナショナリズムよりも，むしろ，戦後の不安，生活の同様に作家たちの目をむけさせたのである。

しかし，日清戦争当時の清国は，日本人の目から見て，アヘン戦争を経て半植民地化した中国

と，明治維新を遂行して一応まがりなりにも近代化した日本とでは，新興国と後進国との戦争であり，その侵略的側面は，ほとんど気づかれないまま，主として作家たちの目は日本国内に向かったと言えよう。しかし，日本とロシアの戦争となると，様相は変化した。日本が，維新を完了する以前に，ロシアは，一応の農奴解放を行っており，フランスをうしろだてに，近代国家としての実力は当時の日本人にとって，途方もない強大なものだったのである。

国内の改革に，絶望したかっての民権派のグループが，とりわけ中江兆民さえもが，ロシアを攻撃することによって，日本の進路を打開できるという幻想に取りつかれるといった事態は，非民直系の弟子，幸徳秋水・伝次郎にとって，当惑するしかない事情をはらんでいた。二葉亭氏四迷も対ロシア強硬策をとっている。

一度だけ，しかり，日清戦後のアンチ・ナショナリズムの動きは，ほんの数年間主流になったとはいえ，日本・ロシアの対決をむかえて，大きく主戦論・非戦論が二つに文壇的にも分裂していったのである。

ナショナリズムとは，はたして，日本の近代文学にとって何を意味していただろうか，

私は，ナショナリズムな問題が明治維新以来，常に，日本国民の前につきつけられてきたことを否定しない。一面では，日本の近代思想史と文学史広い意味での文化史は，ことごとくナショナリズムの歴史であったことは認める。しかし，日露戦争直前になって，はじめて大衆的に各種の，例えば「万朝報」や「二代新報」などの新聞や「六合雑誌」などによって，国民の前に直接，二者撰一の形でナショナリズム（すなわち主戦論）か，さもなくばアンチ・ナショナリズム（非戦論）がつきつけられたのであった。

この時は，日本の近代化がほぼ達成できたことは，プラスにもマイナスにも，この場合，価値観を含んでいない。

明治三十五年ごろから，主戦かまたは非戦かの議論が開始されていた。結果として主戦論が大衆的に勝利したことは，いまさら言うまでもないだろう。そして，それは，第二次世界大戦まで続いていったのだった。

本稿の目的としたのは，ナショナリズムを日清戦争へと直線的に，あるいは連続したものとしてとらえる歴史観への疑問である。

ナショナルなものの追求は日清戦後，一度は疑われ，崩壊しかかった。日露戦争は崩壊しかけたナショナリズムをふたたび底辺から再組織して成立したのだった。二つの戦争の間に一度切れ目をいれて考えないと日清戦争後の文学の可能性は追求しにくくなるであろう。

（了）